
モノクロ漬し

新藤悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ潰し

【Nコード】

N6867Z

【作者名】

新藤悟

【あらすじ】

「死にたがり」

雨水・鏡は自身の死を常に意識していた。「緩やかな死」を夢見て、今日も一日を生きていく。

ただ漫然と生きていた、それだけなのに彼は彼女と出会った。

- opening -

- opening -

寒い。凍えそうだ。

手袋をしていてもかじかむ両手に力を込め、僕は自転車を走らせる。南国九州とはいえ、冬は当然寒い。現に暗い空からは小雪がちらついて、学校指定のコートの前面にだけ張り付いている。ペダルを漕ぐ足をそのままに片手で雪を払い落とす。地面に落ちた小さな塊は、冷えたアスファルトに落ちて僕の自転車に取り残されていた。冬の風は強くて冷たい。空気は凜として、見上げると、夏とは違った白い雲に覆われていて夜空を微かに白黒まだらに変えていた。僕の回りには誰もいない。時折そばを車が通りすぎていく。雪だけが今は僕のそばにいる。

雪は好きだけど冬は僕は嫌いだ。だけど冬特有の澄んだ空気の夜は大好きで、風が無かったらどんなにいいだろうか。雪が巻き上げられて、車もまばらな国道沿いの街灯に照らされて綺麗に見える。それが風のおかげだというのが少し腹立たしい。

左手に着けた腕時計を見してみる。時刻は午後九時を回っていた。

風に負けないよう前傾姿勢にしていた体を起こし、周囲の建物を見る。もう三年間も通り続けた道だから、建物を見れば自分の居場所と帰りつくまでの時間はだいたい分かる。斜め前に煌々と輝くコンビニエンスストアがあった。そこは、冬にはたまに肉まんを買うことがあって、いつ入っても客は僕くらいしかいない。よく経営が成り立ってるな、と思わないでも無いが、それは僕とは関係の無いことだ。僕にとって重宝していれば問題は無い。それに家と高校の

ちょうど中間点に位置しているから目安にしやすいで、だから家まではまだ後三十分は掛かる。

寒さに負けて、ちよっと寄って行くこうかとも思う。だけど、今日はいつてもより遅い。学校に遅くまで残り過ぎた。

センター試験も終わって、国立大学の前期試験まで後二週間。受験生にとっては最後の追い込みの時期だ。他の同級生はみんな街の塾に通っているけど、中には学校に残って自力で勉強している人もいて、かく言う僕もその内の一人になる。幸いにして成績はまあまあ良かった僕は地元の進学校に入学できて、ウチの高校は高三生だけに夜遅くまで校舎を開放している。暖房の無い冬の教室で勉強するのが嫌なのか、あまり利用する生徒はいないけれど、僕はその恩恵を最大限に享受していると言える。

遅くまで、とは言ってもだいたい七時過ぎには見回りの教師が来て帰らされる。でも今日は取り組んでいた数学の問題が解けないのが悔しくて、もうちよっとだけ、と無理を言って時間を伸ばしてもらい、気づけば八時前までになっていた。

見回りに来た担任の数学教師も何も言わず黙って付き添ってくれていたが、途中から時計をチラチラと見始めていた。週末だし、色々と行く所があるのだろう。流石にこれ以上の無理は言えず、そこで中断せざるを得なかったのが残念だった。

人のいないコンビニの横を通り過ぎていく。腹が減っているけど、小遣いも心許ないし、遅くなると母さんが心配するだろう。電話しようにも携帯は持ってないし、そもそも最近少なくなった電話ボックスを探すよりも、さっさと帰った方がマシな気がする。向かい風に負けないよう両足に力を込める。立ちこぎに移行して自転車を加速。眼鏡に張り付く雪が邪魔だけど無視することにする。

寒い。冷たい風が、頬を切り裂いた様な痛みを与えてくる。

(早く帰ろう……)

僕は自転車のハンドルを右に切った。国道から逸れて細い道に入っ
ていき、住宅街に出た。同じ様な家が並ぶそこは、たまに帰り道
として使う道だ。こっちの方が近くて時間は短縮できるが、夜に通
ると街灯が殆ど無いので少し危ない。たまに無灯火で自転車が走っ
てるから夜にはあまり通らないのだけれど、この日は危なさよりも、
早く寒さから脱出したい気持ちの方が勝った。アスファルトの黒と、道
と家を隔てる壁の白さがモノクロの世界を作り出す。壁越しにのぞ
く常緑樹の緑は、今は夜の色に染められていた。

この住宅地は、ともすれば迷路の様で、曲がるタイミングを間違
えるとすぐ行き止まりに突き当たる。同じ業者が建てた家ばかりな
ので、景色で判断はつかない。始めて入ったときは、脱出するのに
無駄に一時間ほどさ迷ったのも、今となってはいい思い出と言えな
くもない。

(もう、ここを通ることも無くなるんだな……)

受験が終わって合格すれば、僕は県外に行くことになる。こうし
て自転車でここや、三年間通り続けた通学路を走ることはなくなる。
そう考えると、少しだけ感慨深い。

だけでもまた、引越した先で同じ様に通り慣れた道ができて、
毎日同じ生活を繰り返し返り始めていくんだらう。新鮮さは失われて、
日常が作り上げられていく。非日常はそこには無い。でもそれで構
わない。大切なのはいかに素早く新しい事に慣れて日常に組み込む
か、だ。

毎日が冒険、なんてのは漫画やアニメの中だけでいい。それらを
読んで、空想して、時々退屈な日常を残念がる。僕にとってはそれ
で十分だ。そうして僕らは歳を重ねて大人になり、空想に憧れる少
年を笑いながら死んでいく。

そんな事を考えて時折、我ながら若さが無いな、と自嘲してみる。
自嘲して、自分の中でうすぐ何かに言い訳するみたいにそれで良い、

と言い聞かせた。

そんな事を考えて意識が散漫になっていたんだろう。あるいは、慣れた道程に油断してたのか。何度目か分からない角を曲がって、もう少して住宅地を抜けよう、というところで、曲がりしなに何かを見つけた。暗くて分からなかった何かは角に隠れていて、見つけた時には間に合わなかった。

「つつっ！」

ハンドルを慌てて切り、何とかそれと直撃するのを避ける。思い切りぶつかるのは避けられたが、代わりにバランスを崩した自転車は呆気無く倒れ、僕は硬いアスファルトに投げ出された。痛みが背中を襲い、肺の空気が押し出されて一瞬呼吸が止まった錯覚に陥る。遅れてガシャン、と自転車音が塀にぶつかる音が聞こえる。

何に僕はぶつかりそうになったのか。もし、これが自分の見間違えだったらひどく間抜けだ。かと言ってぶつかって何かを壊してしまったのなら、それはそれで困る。弁償できるほどの余裕はウチには無いのだから。

痛む背中を押さえつつ不安になりながらも立ち上がって、そつと何かがあった場所に近づく。暗くて確認できないが、何も無い、ということは無く、確かに何かはあった。眼が悪くて夜眼が効きにくい僕は更に近づく。そして息を飲んだ。

それは人だった。少なくとも僕よりは大柄な男の人で、その人は塀にもたれかかるようにして倒れていた。

一瞬だけ僕がぶつかったせいかな、とも思ったけど、そういう訳でも無いことはすぐ分かった。

黒いコートの下からのぞく白いワイシャツ。それは汚れていて、何箇所か破れていた。顔の一部には火傷らしき跡があって、だけでも塀の影にいるせいで程度は分からない。

だけでも何よりもひどかったのは腹部だった。コートに隠されて

いたけど、シャツにはべつとりと赤い血が付いていた。まだそれが新しいことは、微かに当たる向かいの家の灯りで分かった。あまりにも生々しく瑞々しい。僕は呆然とそれを眺めてしまった。どうすれば良い。

ひどく非日常的な光景に、その言葉だけがリフレインされる。鼓動は、激しい。慌てるな。まずは落ち着け。冷静に、冷静に。自分に言い聞かせ、深呼吸をする。二度、三度繰り返す。

眼を閉じた。そして開いてみても景色は変わらない。だけでも、なんだかひどく落ち着いた自分がそこにいた。

ひんやりした空気が頬を撫で、頭の中が澄み渡っていくのが感じる。夜空を見上げてみると、雪はもう止んでいたけれど、分厚くなつた雲に覆われて星は見えない。

改めて思う。どうしようかと。

選択肢は単純で、助けるか、見捨てるか。人として助けるのは当然な事は知っている。でも、僕の中ではこういう事件とは関わり合いになりたくない、との考えも渦巻いている。

どう考えても普通じゃない出来事。きっと何かの事件だろう。ここで通報すれば、この人は助かるかもしれないし、助からないかもしれない。どちらにせよ、救急車に乗って病院まで付き添って、警察に事情を聞かれて、見ず知らずの人と喋らなければならぬ。それが僕にとってはひどく億劫で、想像するだけで胃が痛くなりそうだった。

足元の人物は時折うめき、荒い呼吸を繰り返している。僕はそれを冷たく見下ろしていた。閑静な住宅地で、冬の夜に人影は全くと言っていいほど無い。そしてそれは、この人物の生死の可能性を僕が一手に握っているとも言えた。

ひどく面倒臭い。そう思った。時計を見る。時刻は九時三十分になるうとしている。

(母さんは…もう帰ってる頃か……)

もしそうなら、誰もいない家に驚いてるだろう。そして落ち着かずにタバコを何本も消費してるに違いない。僕が帰ってくるのを待って、夕飯にも手をつけずに。あの人はそういう人だ。

「大丈夫ですか？　すぐに救急車を呼びますんでちよつと待っていてくださいね」

冷え切った男の人の肩を軽く揺すりながら話しかける。小さなうめきだけが返ってきたかと思うと、一度大きく咳き込んだ。血の混じった飛沫が僕に飛んできてつい顔を顰めてしまう。

コートでそれを拭き取り、僕は倒れていた自転車を起こすと乗り込んで住宅地の外へと走らせた。

「もしもし、救急車をお願いします。え？　ええ、怪我人です。お腹から結構出血がありました。場所は……」

電話を掛けながら僕はあの人の感触を思い出す。そして思った。冷たい人間だな、と。母さんにも「少し遅くなる」と電話で伝えて、僕はすぐに元の場所に戻る。男の人は変わらずそこにいた。血は止まっているのかどうか分からない。けども、僕はこれ以上何もする気は無かった。

程なくして救急車がけたたましい音を響かせながら住宅地へ入ってくる。あまりの音に近所の人も家から飛び出してきた。野次馬か、と何とも言えない、ひどく詰まらない気分になりながら彼らを見る。救急車の邪魔をしないよう道だけは開けているものの、好奇心に染まった彼らの存在が正直鬱陶しい。その瞳と、救急車の赤色灯が白と黒の世界にひどく場違いだった。

そんな場所にいるのと吹きつけてくる冷たい風が嫌で、僕は救急車の中に逃げ込んだ。あまり暖かくは無かったけれど、外にいるよ

りはマシに思える。走りだした車内で、救急隊員の人が手際よく処置をしていく。明るい車内で、男の人の傷を見ることができた。きっと、助からないだろう。止まらない出血に何となくそう思った。病院に連絡を取る人と、状況報告の声を上げる人。運転しながら何かを叫ぶ人。それぞれがそれぞれの役目を果たしている。

そんな中で僕だけが何もしないのが何だか申し訳なく感じてきて、偶然目の前に降りてきた男の人の手を僕は握った。

大きな手はゴツゴツしていて、冷え切っている。そして僕の手を弱々しく握り返してきた。うめき声が変わる。声は意味のある言葉に変わって、何かを伝えようとしているみたいで、僕は耳を口元へと近づけていった。

「だめ…だ…俺に触っちゃ…いけない…」

ゴメン、もう触ってしまいました。心の中で、半ば嘲笑うような気持ちでそうつぶやいてみる。今、彼はどんな夢を、もしくは走馬灯を見ているのだろうか。生と死の狭間で、何を思っているのだろうか。

偶然か、必然か。そんな僕の疑問に答えるかの様に、口から零れる言葉が変わった。

一度、腹に溜めて、そして彼は搾り出した。

「……死に…たくない……」

かすれた声で彼は確かにそう言った。

それから後は、驚くほどに僕の予想通りだった。病院に到着した時には、彼は完全に意識を失い、一時間も経たずに息を引き取った。死に顔は静かで安らか。青ざめた顔はもう動くことは無い。僕はそれを見ても何も思わなかった。恐怖も、悲しみも無い。少しだけ、ホンの少しだけ羨望に似た感情が僕の中に、僕の予想通りに湧き上

がって消えた。

何となく、ただ現場に居合わせた、という理由だけで僕は彼の最期を看取り、そして同じ理由で警察から事情聴取を受けた。僕はそれに事務的に答え、知ってる限りをありのままを伝えた。それが終わり、病院の玄関に向かうと連絡を受けた母さんが迎えに来てくれていた。付き添って歩いてくれる母さんの横を僕も歩く。車に乗り込む前にコートを脱ぎ、後部座席に背負っていたリュックと一緒に放り込む。

車が動き出し、僕は深くため息をついた。母さんからタバコを一本だけもらい、1mgのタールと0.1mgのニコチンを肺に吸い込んでもう一度ため息をつく。母さんが心配そうに何かを話し掛けてくる。それに僕は相槌を打って、そして出来るだけ笑顔を浮かべて答えてみせる。大丈夫だよ、と。その時の表情は、きつと本当にいつもと変わらないものだったと思ってる。

翌日、学校に行くと、昼休みに担任に呼び出されて職員室に僕はいた。警察か、それとも母さんからか、学校にも連絡がいついていらしくて、担任に同じく大丈夫か、とかいろいろと心配の声を掛けられた。

僕は大丈夫ですよ、といつもと変わりなく答える。そして少しハニカんでみせながら、不謹慎ですけどいい経験になりました、と言つてのける。それを聞いて担任も安心したらしく、すぐに解放された。

予定調和の出来事。こういう時に取る行動はパターンがあつて、それに沿って動けば予想と大きく外れた事は起きない。ただ、僕の予想と大きく外れた事と、少しだけ外れた事があつた。

『だめ……だ……俺に触っちゃ……いけない……』

あの時、僕が触れたのは間違いだったのかもしれない。そうじゃないのかもしれない。答えは分からないけれど、少なくともこの後

の未来は僕には予想できなかった。

そしてもう一つ、少しだけ予想と外れた事。
敗した。

僕は大学入試に失

- 第一話 幻想、現想 -

- 第一話 幻想、現想 -

- 零 -

死ぬ程楽だった？ 何を君は言ってるんだい？
死ぬことより楽なことなんてあるわけ無いだろう？

- 一 -

春が来た。長く感じた冬が終わり、枯れた木々には花が咲いて、この季節の定番である桜がそこかしこで咲き、そしてあっけなく散っていく。分厚いコートで身を守ってた人々も段々と薄着に変わって身軽になっていく。何となく曇天が多かったような空は晴れの日が多くなり、微かな温もりを与えるだけだった太陽は今は確かな暖かさを僕らに感じさせてくれていた。

そして僕は大学生になった。あの事件はどうやら僕に何らかの精神的ダメージを与えていたのか、予想以上にあっさりと前期試験を失敗してしまった。元々が先生に持ち上げられて挑戦したようなもので、僕自身はあまり受かるとは思ってたからダメージは大きくはない。

なまじ成績が良かったから誤解されがちだが、僕自身の能力はそ

れほど高くはない。確かに高校では上位にいたけれど、それだつてただ勉強をしていたからそのポジションに入れただけだ。部活にも入らず、あまり趣味もない。一人遠くから通っていたから近くに友達もいないし、僕自身あまり友達と遊ぼうという気にもなれなかった。

気軽に話せる友達はいた。けれども彼らは同じ塾に通っている仲間同士で仲が良かったから僕が深く入り込むスペースは無い。その程度の付き合いの友人とつるむ気も起きず、だから僕は時たまテレビを観るだけで、勉強をするくらいしか無かった。

人並み以上に勉強はしたつもりだ。それでいて第一志望校にかかるうじて受かる程度の実力しか無い。教科書レベル、もしくはそれより少し程度の高い問題しか解けないのだ。もうすでに学力レベルは僕の限界に達していて、だからこそ受験に失敗しても「やっぱりか」程度にしか思えなかった。

何にしる、期待されるのは僕にとって過大評価に過ぎない。過ぎなくて、でもその期待に応えたいとは思ってしまった。そして、期待に応えられなかったのは悔しい。自分の能力不足を棚に上げて、原因をあの事件に求めてしまうのはきつと僕を持つ弱さなんだろう。

幸いにして後期試験で別の大学に合格し、晴れて僕は大学生という気楽な肩書きを手に入れる事ができた。本来ならばここでも必死に勉強に励むべきなのだろうけど、そんな気概を持っている学生が日本全国にどれだけいるのだろうか。誰かそのところを調べてみてくれないだろうか。もっとも、僕は調べるつもりは猫の毛先ほどもないけれど。

大学生。そこそこの責任と大きな自由。モラトリアムの時間。何と素晴らしい。そこで得るのは経験か、墮落か、それとも怠惰か。きつとそのどれでも無く、その全てなんだろう。

僕自身は奨学金を受けて学生をしている以上、ある程度真面目に勉強するつもりではある。けれど、周囲に流されやすい僕がそれを継続できるかという和我ながら怪しさバツグンで、それなのに無理

に抗うのも面倒な話だ。だから僕も大多数の学生の中に埋もれてしまっただろう。

「えー、こうして運動方程式を立てていくと微分方程式ができあがるわけですが、この場合の微分方程式を解くためにはまず『e』のラムダエックス乗をこの式に代入します。そして……」

夢も目標も無く毎日を僕は過ごしてきた。その流れに乗ったまま入学式で人生初のスーツを経験し、大学近くの安い木造アパートを借りて一人暮らしをスタートさせた。大学の寮なら家賃はずっと安いけれど、キッチンも風呂もトイレも共同、という環境が嫌で、アパートを借りた。最低でも風呂やトイレくらいは一人で入りたい。よって少々無理したわけだが、まあバイトをすれば何とかなるだろう。どうせお金を使うこともそうそうあるまいし。

「こうするとは未知定数Aが出てきまして、ここで初期値を使います。t=0の時の……」

何もかも初めて。だけど初めて尽くしの慣れない環境での時間はあっという間に終りを告げた。これまでとは違う教育システムにさえ、まるでずっと前から知っていたようにすぐに馴染んだ。

不慣れは慣れに、特殊は平凡、非日常は日常に。

目標は暇つぶしに、希望は退屈に食い潰され、努力は怠惰に塗り潰される。

そうして一ヶ月が過ぎた。

チャイムが鳴り響く。それと同時にため息に似た何かそれぞれの中から吐出された。それは学生だけでなく授業をしていた教授さえも同様にして同等。

「それでは今日はここまで。さっき言った問題をレポートとします

ので、やってくるように」

教科書に印を付け、閉じる。顔を上げると教授はすでに黒板消しで黒板をモスグリーン一色に染め始めていた。

気の早い学生はすでに教室を飛び出していく。大多数は片付けそつちのけで友達とおしゃべりに興じ、静かだった部屋は今ももう違った色に塗り潰されていた。

僕もため息を吐き出し、ルーズリーフを教科書に挟みこんで教室を出て行く。吐き出された息には空気以外の何が含まれているのか、僕は興味はない。

古い建物の、少しだけ暗い教室から出ると空は五月晴れの快晴だった。燦々と降り注ぐ日光に瞳を焼かれて白く染まり、僕は立ちくらむ。

「おつす！ 鏡、お疲れっ！」

そんな僕を後ろからの衝撃が現実を引き戻す。振り返るまでもない。背後から底なしの元気で僕に飛び掛ってくるのは一人しかない。

「なんだ、ちゃんと来てたのか」

「ちよっ、それお前ひどくね？」

口では非難するものの、その表情に気にした様子も無い。もちろん僕もそれが分かってるからこそ、他人に軽口を叩けるのだ。

生来なのか、それとも成長していく中でひねくってしまったのか、僕は口があまり良くない。無論、他人にやたら噛み付いたり失礼なことは言わないが（というより言えないのだが）、一度親しくなると自由に口を開けるようになる。自由に口を利ける、という事は一切の気兼ねがなくなるということで、僕は態度もそれ相応に変わる。

だから言葉を交わす人間はそれなりにいても友人と言えるのは少ない。というよりも、失礼な態度をとっても大丈夫な人間としかあまり付き合わない、というのが正解か。となれば当然親しい、と言える人間は限られてきて、たった今僕に飛び掛ってきたこの君原正祐も残念ながら僕がそんな態度をとっても大丈夫という、名誉ある称号を勝手に授けられた人間だった。

「嘘だよ。授業中にコソツと後ろから入ってくるのが見えた。ずいぶんと社長出勤だな。大方、先週教えてやったレポートもやってないんだろ？ わざわざノートまで貸してやったのに」

「うっ……それは、まあ、なんだ、その……」

途端に曖昧な笑みを浮かべてしどろもどろになる正祐に、僕はこれ見よがしにため息をついて見せる。わざとらしく肩を竦めて、呆れた、といった態度を示す。もちろんこれもポーズだ。

身長一七三cmと、一七二cmの僕とほぼ同じ背丈で体重もほぼ同じ。だけでも日本人特有さを大事にしている僕とは違って正祐は、昔からなのかそれともいわゆる大学デビューなのかは知らないけど、髪を見事なまでの金髪に染めていた。男の顔なんぞ見ても嬉しくもなんとも無いが、髪の色以外の容姿は至って普通。ややイケメンよ。りか。初回の授業から寝坊し、入学当初から合コンや徹夜で遊び倒すという、まさに絵に描いたような大学生生活を満喫している。テニスサークルに所属していて、今も形だけのラケットを肩から下げているコイツに「テニス好きなのか？」と尋ねた時は予想通りの返事が返ってきて逆に驚いた。「だって楽しい大学生活を送るためにはテニスサークルは必須でしょっ!？」ノリが良いのは構わないが、少々世の中をなめてるんじゃないのか、と思わないでも無い。

黒髪黒目黒ぶちメガネで工学部所属。他人の性格評価で「落ち着きすぎてて若さが足りない」というなんとも有難い評価を得た地味な僕とは正反対の若々しい、ともすれば幼すぎる、とも形容できる

正祐とは何故か気が合った。同じ学科の懇親会会場で話したのがきっかけだったが、それ以来一緒に過ごすことが多くなっている。主に僕が世話をしている気がしないでもないが。

「もういいや。めんどくせえ。単位落としまえよ」

「いやいやいや！ まだ大丈夫大丈夫！ まだ一ヶ月だし、ほら、もう一通り楽しんだからこれからは心を入れ替えて生活するし！」

僕なんかと一緒にいるよりも、もっと楽しく過ごせる人間がいるんじゃないのか、と思わないでもないが、僕としてもまあこういった話し相手はそうそう得られるわけでも無いのでそこは黙っておく。実はマゾなんじゃないか、と思ったのはあくまで秘密で。

「もう一ヶ月だし、そろそろお前もバイト始めるんじゃないのか？

この前言ってただろ」

「あーうー……」

「あーうー、じゃねえよ。ま、どうせ僕には関係ないけどな」

「いやー、そこはね、ほらさ、友達を助けると思っただノートなんぞを貸してくれると嬉しいかなー、なんて……」

「やだ」

「頼む！」

そう言ってパン、とやけに景気いい音を立てて手を合わせてくる。無論僕は神様でも仏様でも無いのでご利益は無い。無いはずなんだけど……

「……」

狭いキャンパスのど真ん中でこつこつも真剣に拝まれると、どうもやりづらい。今も他の人がチラチラとこつちを見ながら通り過ぎてい

つて、僕としては異常に居心地が悪い。大した事では無いと分かってはいるのだが、大勢に注目されるのはどうも苦手だ。太陽の熱とは別の意味で背中にびっしりと汗が浮き出てくるのが分かって、この異常事態を終わらせるために僕はもう一度ため息をついてみせた。

「分かったよ……でも寝ててもいいから授業だけはちゃんと参加してろよ。出席点が足りないのはどうしようもないからな」

「さんきゅっ！ 心の友よ、恩に着るぜっ！」

何処かのいじめっ子みたいなセリフを口にしながら抱きついてくる正祐。そっち系の趣味など織毛の先ほども無い僕は横に逸れて、それを丁寧にお断りする。

「とりあえず食堂に行くか……」

「あれっ、なんで？」

と一人でつぶやいてる正祐を無視して僕は食堂に足を向けた。くだらない会話に時間を取られて、いつの間にか周囲の人影もだいぶ減っている。このままだと席が空いてるかどうか。後ろで呆然としてるだろう正祐を促そうと僕は振り返った。

「おい、ボーっとしてないで……」

「何してんだ？ さっさと飯食おうぜー」

後ろにいたはずの正祐が何故かすでに前にいて僕を呼ぶ。テレポーターか、貴様は。

くだらない葛藤をよそに悩みの種が解消されたからか、実に晴れやかな表情だ。他力本願なのが癪にさわらないでもないが、まあこれモコイツの生き方なんだろう。別に悪いことじゃない。

「？ おーい。もしもーし」

でもまあ、コイツのおかげでそこそこに退屈しない学生生活を送れそうだし、事実、高校時代よりも楽しいと僕は感じられてる。その代償と考えれば単位の世話くらい安いものだろう。

止めていた足を動き出し、正祐の隣に並ぶ。少しだけ僕の前を歩いているのが表してるみたいに、僕をこれからも引っ張っていつてくれるんじゃないかと予感してる。いや、これは願望か。ずっとレールの上を歩き続けてる僕が、ちょっとだけ道を外すのを許してくれるという。

「ん？」

一歩二歩と歩き始めたその途端に何かの気配を感じて僕は振り向いた。けれど振り向いた先には誰もおらず、感じた気配もすでに無くなっていった。誰かに見られてた、というのとはちよつと違う。誰かに見られてる意識というのはずっと昔から強く感じてきたから良く知っている。今回感じたのはそれとはまた違った、妙な感じ。例えるなら急に生暖かい風が首筋を撫でたような、空気の異常。明確な違いは感じた僕にしか分からず、誰にも説明できない歯がゆい違和感。それが指向性を持って僕に襲いかかってきていた。

「どうしたんだ？」

「いや、何でもないよ」

首を振って正祐に僕は答えた。どうせ大した事は無い。どうにも僕は周囲に対して敏感すぎるのだ。自分に関係ない事でも気になってしまう、僕の悪い癖。そんなのでデリケートな胃にダメージを与えるのもバカらしい。些細な事だ、どうせ。

関係ない、と割り切って僕は忘れる事にした。僕と関係ない事な

らそれで良い。関係してくるならその時、だ。どうせ原因も分からないなら対処のしようが無い。

「あつ！」

食堂に入った途端に正祐はそんな声を上げた。違和感について考えてたせいで、正祐が何かを見つけたのかと思っただけ、正祐は自分の財布をこれでもか、と言わんばかりに凝視してた。賑わってるこのキャンパス唯一の食堂のせいであまり周りの関心は集めなかったが、ワナワナと震えながら大声を出しやがったおかげですぐ後ろの人から何事か、という視線をビシビシと感じる。だがコイツはそんな事お構いなしに、またしても僕に向かって手を合わせてきた。

「……金貸してくんない？」

そう言って四円しかない財布を見せてきた正祐を僕はグーで殴っていたりする。

・
二
・

大学に入った途端に年齢というものはスキップされるものだと僕は考えている。具体的には入学した瞬間に誰であろうと二十歳になる。それくらいお酒についてみんな頓着は無くなるし、周りの大人

たちも誰も注意はしない。よほど無茶な飲み方をしない限りは目くじらをたてることも無い。実際、入学早々お酒を飲む機会には事欠かないし、今日もまた僕はその席で一人黙々とグラスを傾けていた。酒の場は嫌いではない。けれど、見知らぬ人たちの中で心から楽しむことなど僕には到底無理だと、大学入学してからの一ヶ月で学んでいる。酒を思いつきり飲むのは気心の知れた友人とだけ。そう決めていた僕は今日開かれたとあるサークルの歓迎会に、ただ食費が浮くからという理由だけで参加して、勧誘に近寄ってくる先輩たちと適当に話を合わせながら料理と酒を楽しんだ。周りの空気にあてられてそれなりに楽しくはあったけど、所詮それだけだ。僕という人間がそんな会で心から楽しめるはずもなく、僕も最初からそれが分かっていたから、二次会のお誘いも断って一人夜空を時折見上げながらアパートへの帰路を歩いていった。

夜空を眺めるのは良い。特に雲一つない時は最高だ。星座の名前に興味は無いけれど、星を見ると何となく心は落ち着く。まだ少し肌寒い夜風が火照った体に心地良く効いてくる。

鞆を持たず、財布と携帯と鍵の三種の神器だけを身につけて、誰への気兼ねなく歓迎会の行われた賑やかな街を歩き続けたつもりだった。金曜のおかげで何処の店もドアが開く度に店内の喧噪が漏れ出て街を彩り、そして僕の神経を密やかに逆撫でする。

楽しそうな声。そして僕には縁の無い世界。

僕と言う人間が馴染めないのはいささか残念ではあるが、それが僕である以上仕方無い事だ。

角を曲がって路地へ。路地は路地でお店がいっぱいあって、店員らしき人が道行く人たちに声を掛けている。そんな路地をさらにもう二、三か所曲がれば急速に声は小さくなり、あつという間に静かな場所が広がる。そしてそこそが僕の居るべき場所。

逃げたわけじゃない。逃げたわけじゃなくて、僕を繕わないでも大丈夫な世界へと戻っただけ。

「とは言っても…言い訳だよなあ……」

ぼやいてみるが、別に気が晴れるわけでもない。

自然と視線は地面へと下がって視野が狭くなる。それに引きずられるみたいに酒のせいで高めだったテンションも急降下。いつもの高さに落ち着く。暗がりには道行く人が捨てていったゴミがそこかしこに散らばって、まだ夜も早いというのに誰かが胃の中身を戻した跡があった。脇には猫の死体。車にでも跳ねられたのか、寂しく一人で亡くなっている。

「死ぬ時ってどんなだろう……？」

猫の向こう側に車の影を想像する。急速に迫ってくる車。鳴り響くクラクション。そして衝突音。僕の視界はグルグルと回り回って地面に激突。暖かさも冷たさも何も感じずに意識が黒く染まっていた。

そして僕の想像は途絶えた。いつの間にか閉じていた眼を開く。猫は死んで、僕はまだ生きていた。

「みんな何を考えながら生きてるんだらうね」

歩きながら独りごちる。

毎日が楽しくないわけじゃない。一日の中にも楽しい時間、面倒な時間、辛い時間、悲しい時間があって、辛い時や悲しい時よりもずっと楽しい時間が多い。

友達と過ごす時間は楽しい。

ご飯を食べている時は幸せ。

眠い時に眠る。それも幸せ。

幸せだと思える時間はそれなりにあるはずで、毎日それを僕は享受している。だから僕は幸せなはずだ。

なのに。

その幸せな時間さえも面倒だと感じている僕がいる。生きることが面倒だと感じている僕が確かにそこにいる。

罰当たりだ、と思う。生きたいのに生きられない人、生きることが拒否される人は世の中にはいて、僕はその中で生きることがまだ許されている。これだけでも幸せなんだろう、きつと。

「そのはずなんだけど……」

死んでもいい、と思ってる自身を否定できない。別に死にたいわけじゃないし、そこまで世の中に絶望してるわけでもない。そもそもが絶望なんてしょうが無い。希望が無いから。だから生きていても死んでしまおうが構わない。消極的自殺願望者というべきか。

願うのは緩やかにして急速な死。いつ死んでも誰も恨まないし、死ぬ時はあっさりとして死んでしまいたいという僕のわがまま。そしてそれはたぶん、実現しないんだろう。世界はそこまで僕に都合良くはできていない。

こんな風に考えてしまうのは僕だけなんだろうか。もしそうなら、他の人は何を願って生きているんだろうか。

「まったたく……」

自分にため息が出る。いつまで経っても治らない僕の癖。どれだけ歳を無駄に食べばこの思春期みたいな思考から抜け出せるんだろうか。

「さっさと帰って寝るか……」

こんな何の生産性も無いクソツタレな考えは寝て忘れてしまっに限る。寝て起きればまたいつもと同じ朝。そして相似な一日を過す

していただけた。

と言いつつも気づけば僕は見慣れない場所へと入り込んでいた。元々があまり通ったことの無い道だったから、何処かで曲がる場所を間違えたのだろうか。少しは酒が入っていたせいもあるかもしれない。立ち止まって振り返ってみるけど、もうすでに自分が何処にいるのか分からなかった。戻るか、それとも進むか。

普段だったら戻るんだろうけど、と思いつつも僕は前に足を進める。アルコールが入ると無駄にアクティブになるのも僕の悪癖の一つだ。真っ直ぐ進めばその内に大通りに出るだろう。地球は丸いものだから。酔った頭で気楽にそう考えながら、静まり返った狭い路地が多くある住宅街を歩いた。

そうして十分も歩いただろうか。時計を見てなかったのどくらい経ったかは分からない。そしてふと気づく。

「風が無いな……」

昼間の陽気そのままの格好の僕に肌寒い風が吹いていたけど、今は完全に止んでいた。いや、止んでいたと表現するのは正しくない。

「よどんでいる、の方が正解かな」

全くの無風。風が無いどころの話では無い。木々は静まり返り、服は揺れず、空気の流れが一切感じられない。妙に息苦しくて、自分が暑いのかそれとも寒いのかも微妙。もしこの状態が続けば、空気も腐り落ちてしまうのではないかとさえ思える。

「まるで世界が隔離されてしまったみたいだ……」

小説でよくあるストーリーが思い出した。突然異世界に召喚されて、右も左も分からぬまま勇者として魔王退治に向かわされる。平凡な

日常が突如として終わりを告げ、慣れぬ世界に苦しみながらも仲間
に助けられながら目的を果たしてハッピーエンド。だけど現実にそ
んな事があるはずがない。

そんなハッピーエンドなんてものは妄想の産物で、有り得ない。
有り得ないからこそ皆が物語を愛するのだから。

気味の悪さを感じて僕は少し早足に歩き始める。一步を大きく、
回転は速く。ともすれば大きな足音が聞こえそうな程に、内心の心
細さを誤魔化すように歩く。

歩きながら違和感を覚える。何かがおかしい。空気だけでなく、
何か足りない。家を出る時に忘れ物をしたような、そんな些細な
感覚。些細なのに気になって仕方ない。

気持ちの悪い汗が背中を流れている。額に手を当てると、びっし
りとした冷や汗がまとわりついた。

落ち着け。自分に言い聞かす。

一度足を止めて深く息を吸い、空を見上げる。そして気づいた。
どの家にも灯りが点いていない。まだ寝静まるには夜は浅く、辺
りには古い家や対照的な真新しいマンションが建っている。なのに
部屋の窓からは一切光が漏れていなかった。そのくせに通りの街灯
だけは妙に明々と道路を照らしている。

加えて音も無い。大通りから離れているからかとも思ったが、こ
こまで車の音が無いのはおかしい。人の影も無い。眼に入る景色は
まるでハリボテの様で生気を感じさせてなかった。どうなってる
んだ。何か変化が欲しくて、僕はポケットに手を入れる。と、携
帯に触れた。

慌てて取り出し、折りたたみ式のそれを開いた。そして半ば予想
通りの姿を見た。

仄かな光を放つ画面の上にある携帯のアンテナは圏外。それなり
の都会でこれは有り得ない。試しに正祐に電話を掛けてみるけど、
耳にはお決まりの文句しか聞こえてこない。

その時。

突然、落雷に似た音が耳をつんざく。地面を揺らし、ハリボテの窓がガタガタと震える。

それに続いて銃声の様な音。今度は爆発。隣の家の二階が吹っ飛び、破片が空を舞った。

「なっ!？」

ガラスの雨が僕に向かって降り注ぐ。転がるようにして塀の影に隠れ、両手で頭を覆った。屋根の破片だろう。大きな瓦礫が目の前に落ちて弾ける。細かい破片は弾丸の様に手に落ちてくる。

「くうっ……! 何なんだよ、コレッ！」

人工物の雨が終わらない内に再び爆音。今度は向かいの家が一気に半ば程崩れるのが見えた。続いてその隣も。

雨が止んで、ようやく僕は顔を上げた。そして見た。

黒と白の二色しか無かった夜空が赤く染まっていた。崩壊した家から轟々と炎が昇り、僕を見下ろしていた。いや、見下していた。

視界一杯に広がる炎が意思を持ったみたいに動きまわり、ただ呆然として見上げるだけの僕を嘲笑っている。そんな気がした。

首を捻って他の場所に眼を移す。

爆音や崩壊音に混じって飛び交う怒号。痛いほどの静寂に包まれてたはずなのに騒がしいまでの叫びがそこかしこから上がっている。その事に、僕はやっと気づいた。

少し離れた、五階建てくらいのマンションの一角が崩れる。外装のパネルがガラガラと音を立ててアスファルトを傷つけ、だがそこから剣を持った男が飛び出すのを見た。

電柱を蹴り、屋根を蹴って空を舞う人間。いや、人間と言って良いのだろうか。

何者にも、重力にさえ縛られていないかのように自由に空を飛び跳

ねる。そして手には大剣。物語の世界みたいに戦う彼がそこにいた。

「そっちに行つたぞ！！ 援護しろっ！！」

怒鳴り声に等しい命令が辺りに響いて、それに伴い地面から銃弾が吐き出された。

目の前で飛び跳ねていた男性を援護するように放たれ、視線をその行き先に動かせばまた別の男が屋根の上に立っていた。

彼もまたあちこちを飛び跳ね、銃弾をかわしていく。だが、かわしきれていない。

遠目できちんと見えないけど、かろうじて当たっていない、というのが正しいか。避けると言うよりもよるめいているように見える。

「死ねよっ！」

何とか体勢を整えて、男が構えた。その瞬間を見て、僕は驚嘆した。

叫んだと同時に何も持っていなかった掌から火の玉が飛び出す。

頭大の炎が剣を持った男目掛けて飛んでいった。

一発だけでなく、何度も何度も走りながら撃つ。剣を持った方もジャンプして避けて、少しずつ距離を詰めて行っていた。お互いが攻守を繰り返し、一撃一撃が遠目からでも必殺の威力を持っていると分かる。紛れもなく真剣に戦っていた。

それは魔法だった。魔法の世界だった。男なら一度は憧れる世界。現実を知らない幼い頃には自分にだってRPGのキャラクターみたいに魔法が使えるんじゃないか、と空想を膨らませていた。そして現実を知って切り捨てざるを得なかった世界が眼の前にあった。

二人の距離が一足に近づく。至近距離からのファイアーボールを避けると、逆袈裟斬りに手の中の剣を振り上げた。

そこに影が割り込んだ。見るからに頑丈そうな大きな盾を前面に

押し出して、剣を防ぐ。

一度剣を持った男が離れ、その隙を逃さずに炎を放つ。体を捻って避けたが、恐らく髪くらいは焼けただろう。傍目から見てもそれくらいギリギリのタイミングだった。そしてそれは不幸にも僕の方目掛けて飛んできていた。

「うわぁっ!？」

我ながら情けない声を出してその場を飛び退く。転げ回りそうにしながらも、僕は驚きを禁じ得無かった。

体が軽い。

まともなここ数年は体育以外に運動はしてなくて、僕の体はなまりきっているはず。なのに一足で数メートルの距離を助走もなく悠々と跳んでいた。

これならばもしかして

僕の中でむくむくと何かがこみ上げてくる。それは誰もが捨てたはずの幻想。遠い昔の憧れ。

僕にもできるかもしれない

崩れかけた塀に手を掛ける。力は要らない。ただ軽く地面を蹴るだけ。

果たして僕は簡単に塀に乗れた。そして塀を蹴る。体が宙を舞う。いと簡単に地面は離れていって、二度、三度屋根を蹴って駆け上る。

流石に彼らほど自由には跳べない。けれども今の僕には十全。高く高く昇り、開けた視界からは彼らの戦いの様子が良く見える。

彼らから少し離れた所で光が瞬く。どうやら、他の場所でも戦闘

が起こっているらしい。

グッと拳を握り締める。

間違いない。僕は高揚している。心臓が高鳴る。こんな気持ちは何年ぶりだろうか。

再度足に力を込める。屋根を離れ電柱を蹴る。マンシヨンの壁を駆け、別のアパートへ飛び移り、遙か高みから文字通り見下ろす。地面では、彼らと違って自由に跳べないのか、多くの武装をした人たちが、ある人は空目掛けて銃を放ち、また別の人は地面に力無く転がっていた。その中で一人、あちこちを駆け回っている人がいた。かなり長い黒髪に七分丈のシャツとパンツをはいた女性。申し訳程度に防弾チョッキらしき物を着ているけど、一向に戦闘には参加していなかった。倒れている人の所に駆け寄ってはその人に向かって手を当てていた。

あれか、ゲームで言うところの回復役みたいな人か。現実離れた環境にどうにも思考がおかしい。まるで、僕らが決して入り込めない空想世界のように現実感の無い言葉が出てくる。

しゃがんで手を当て、また別の場所に飛び跳ねるみたいにして忙しそうに働く。髪が踊り、時折光が彼女の横顔を照らし出していた。

(へえ……!)

暗いのと遠いので見えづらいけど、ちょっとだけ見えたその顔は結構可愛かった。横顔だけで判断はできないが、かなり可愛い部類に入ると思う。

あんまり女性の顔を凝視するのも良くない。そう思った途端、まるで僕に気づいたみたいなのタイミングで体を翻して別の場所に行ってしまった。そして入れ替わる様にして別の人が倒れてる人に近寄ってきた。白衣を着た、見るからに医者らしきその人は手際よく道具を取り出して治療を施していった。

あれ、じゃあさっきの人は何をしていたのだろうか……？

もう一度手を当てていた女の人を目で追いかける。別の人に手を当てていたが、それ以上他に何かをしている風では無い。その証拠にまた同じ様に医者らしき人が手当を繰り返していた。

僕は彼女の姿をずっと追いかける。どうしてだろうか、いつしか僕の関心は魔法でも戦闘でも無く、彼女自身に向けられていた。

まさか、彼女に惚れたとか？ それこそ有り得ない。僕が誰かに恋をするなんて。

浮かんだ考えに自分で突っ込みを入れて笑う。ホントに、なんて馬鹿げた考え。

頭を振ってそんな考えを振り払い、顔を上げた。

ドキツとした。

顔を上げて彼女を見た時、彼女もまた僕を見ていたから。

初めて正面から彼女の顔を見る。大きめの目に小ぶりの鼻。絶世の美人、というわけでは無いけど、愛嬌があつて思ったとおり可愛らしい。そんな彼女がこっちに驚きの表情を浮かべて呆然としていたけど、すぐに我に返って何事かを叫んでいた。だけど悲しいかな、周囲の音がうるさすぎて全く声が届かない。

必死で彼女が叫んでる。その表情は慌ててる様でもあり、僕に対して怒っている様でもある。

きつと勝手にこんな所に来てしまった事を責めているんだろう。

少し落ち着きを取り戻した頭でそんな事を考える。どう考えても僕みたいな人間がいる所では無い。

そう、僕はあくまで一般人。物語の主人公になりたくてもなれない、力の無い町人Aに過ぎないのだから。傍観者は遠くで勇者の成功を祈るだけいい。

そう考えると、僕がひどく場違いな場所にいる気がしてきた。いや、気がする、じゃない。実際に僕はここにはいけないのだ。

彼らは異常だ。そしてこの場所も、空間も。

ここは危険。ずいぶん遅かったが、ようやく僕に対して脳が警

報を発する。瓦礫が舞い、まばゆい火炎が肌に熱を遠くから伝えてくる。よくよく考えれば今、僕がいる場所も三階建てのアパートの上。柵も何も無い、むき出しの空に僕は接している。

早くここを離れよう。離れるべきだ。幸いにして隣の家の屋根までは普段の僕でも降りれる距離。不思議な世界はこれで終り。帰って寝れば何も無かったと信じられる。

本当に、そうなのか？

一度知ってしまった世界。憧れ。知ってしまった僕は戻れるのだろうか。

大丈夫、諦める事には慣れているよ

自分で自分に語りかける。これまでそうやって生きてきたから。だから僕は変わらない。彼女から眼を離して僕は屋上から飛び降りようとした。

その時、突然の横殴りの衝撃。そして灼熱。熱さと痛みが遅れてやって来て、自分を覆っているものが炎だと気づいたのは間抜けにも空を飛んでしまっただけだった。

ここは危険だと分かっていた。なのに、なのに僕は逡巡してしまっただ。

アツイ。クルシイ。

息もできず、火を消すこともできない。どうする事もできずにもがき、僕は地面に近づいていく。その最中に思ったのは

ああ、これでやっと

そこで思考は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867z/>

モノクロ潰し

2011年12月23日00時54分発行